
遺書にはならない足跡

セグメント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺書にはならない足跡

【Nコード】

N1131X

【作者名】

セグメント

【あらすじ】

日常的些末事。今日も明日も日常は廻る。

本作品は現代詩フォーラムでも掲載しています。

1 (前書き)

随筆の形を取っていますが現時点で完成が見えていないこと、完成させられるか分からないことなどにより、作品としてまとまりがないかもしれず、表記揺れなどもあるかと思えます。ご了承ください。

ここにこうして書き記すことに何の意味があるだろう。何の輝きがあるだろう。何の翳りがあるだろう。私は最早、誰に伝えることも意味があるとは思えなくなってしまった。ここで言う「誰」とは、厳密には私が私であるということを知る私の身内、友人、知人などを指す。よって、私を私個人と知らない「誰」に向けて、こうして足跡を遺すこと、あるいは伝えること、あるいは散らすことには何の意味もないとは現時点では少なくとも私は思えない。思いたくないのかもしれない。はたまた、私はただ自らの心情を体系立てたいだけ、整頓したいだけ、組み立てたいだけ、書きたいだけ、言いたいだけ、伝えたいだけ、吐露したいだけ、何もなかったことにしたいだけなのかもしれない。

良く、世の中では「正解も不正解もない」だとか「頑張ることや努力することに意味があるのであって結果が全てではない」だとか「嘘も本当もない」だとか、そういう如何にも「正しいこと」であるかのようで「真実」であるかのような言葉が多少の形や表現を変えて不確かなまま、撒き散らされている。そして、それを多くの人間は、たとえそうとは言わずとも心の奥底の透明なところで受け入れている、理解している、理解しようとしている、悟っている、分かっているように見えるのだ。少なくとも私には。

かく言う私もその内の一人かもしれない。それこそ「正解も不正解もなく嘘も本当もなく正しいのか否かも良く分からない」事柄だ。繰り返しになるが、私がこうしてここにこれを書き記すことに意味があるのか、正しいことなのか、真実なのか、それも良く分からない。ただ、私はもうひどく擦り切れてしまっている自覚を強く否定することは一人では不可能だ。病名など、幾らでも付けられるだろ

う。人間は皆、何かしらの病なのだ。体でも、心でも。あるいは、そのどちらも。人は皆、多かれ少なかれ、露見しているかどうかは別として、誰も彼も病んでいる。そう、信じただけなのかもしれない。自らがそうであることによって。

何もかもが曖昧で不透明な言い方、表現になることを許して貰いたい。私は本当に良く分からないのだ。今の自らの心情も、本当には何を記したいのかも、この行為に果たして意味があるのか、また、意味を欲しがっているのかすらも。

私の感情や行動を甘えだと感じる人もいるだろう。思考や性質を異質に思う人もいるだろう。幼稚な自慰行為だと笑い蔑む人もいるだろう。だが、私は本当の意味で私が私個人とは結び付かない、「誰」も私のことを知らないこの場所で一度、書いてみたかったのだ。私という苦悩とでも言うべき、あるいは悲嘆や驚愕、あるいは混乱であり困惑、あるいは生きることと死ぬこと、はじまりからおわりまでの全てを。まだこうして生きているわけなのだから終わりは書けないだろうが、私はこれを揺りかごから墓場までの心持ちで書き進めて行きたい。

さて、そうは言ったものの何から綴れば良いものだろうか。一人の人間は本当に多くの数え切れない程のものを抱え込んでいる。使い古された表現ではあるが、それこそ星の数程、あるだろう。

単純に、好きな食べ物や好きな飲み物、好きな色や好きな動物。少々複雑に、好きな異性のタイプや好きな声質、好きな音楽や好きな景色。更に複雑に、好きな家庭の雰囲気や好きな分野、好きな表現や好きな歌い方。もう少々複雑に、好きな感情や好きな感覚、好きな時間や好きな人間。いや、どれもが単純至極かもしれないし、複雑至極なのかもしれない。しかしながら好きの反対に位置する嫌いに関する事柄も存在するわけであるし、家庭環境や職場の環境、友人関係や恋人との関係、身内の問題、知人から持ち込まれる相談事、日常的な悩み、幼少時に植え付けられたトラウマ、精神的疾患、身体的疾患、金銭問題、時間的余裕のなさ、したいこととすべきこ

との葛藤、叶えたい夢、性的欲望、フラストレーション、知識欲、創作意欲、購買意欲、喜怒哀楽のコントロール、自律神経のコントロール、幸福を希う気持ち、絶望に押し潰される瞬間、強く頭を振っても尚に流れる涙、死を得ようという衝動、明日を強く祈って眠りを掴む切望、生きて歩いて行こうという決意。

何故、人間はこんなにも複雑熾烈を極めるのか？

世の中は、繊細な人間では生きて行けないように創られているのかと何度も何度も疑い、そんなにも自分は弱々しく、あるいは繊細、はたまたお綺麗な自分自身を気取っているだけなのかと、幾度も幾度も幾度も問い掛けている。だが最早、その質問を誰にして良いのか分からないし、分かるはずもないのではないかと思いつめているところだ。

二〇一一年の三月十一日に日本中を震撼させた大地震が起きたことは記憶に新しい。それどころか、現在も出来事は進行中と言つて良いだろう。少なくとも福島県にある原発に関しては今も尚、収束の兆しなど見せてはいないし、それどころか、こうしている一分一秒の間に、放射能はゆるゆると空中に拡散し続けているのだから。たとえ福島県や東北、関東にいない人々でも全く身体的に影響を受けていないとは言えないのではないだろうか。

目視出来ない放射能のことであるし、私にはそういった分野での専門的知識などは皆無に等しい。私に出来ることは垂れ流されるインターネット上でのニュースを追い掛けて読み、一喜一憂し、自らの身を守る為に行動するのみである。自らの身を守る為に、そうは言ってみたところで出来ることなど、それこそ皆無に等しいのだ。今回の出来事に関しては人の数以上に様々な影を誰も心に落とすたのではないだろうか。私は明らかに震災以前と以後で根本が変わってしまった人間の一人だ。

しかし、私は関東に住む人間であり、実質的に被災したわけではない。家は無事だし、ガスや水道や電気にも問題はない。私以上に大変な環境に今も尚、身を置いている方々は本当に沢山いることだ

ろう。他人事のような書き方になってしまふことを許して貰いたい。他意はないが実際に他人事であり、気持ちを推し量ることですら、私にはどうやら偽善めいたものすら覚えてしまふのだ。

原発の施設のある場所に住んでいた人々の家が津波によって目前で流され、仮設住宅の建設もなかなかままならず、衣食住に困り、犯罪が増え、避難勧告が出された地域には置き去りにするしかない。つた牛や豚などの家畜動物がいて、娯楽やプライバシーに欠ける生活を強いられている。そのような人々の状況を私のような一人が実質的に想像することなど出来るだろうか？ テレビや新聞といったマスメディアはこういう時にこそ力を発揮すべき媒体であるように思うのだが、肝心なことはまるで意図的に告げないようにしているのではないかとすら思ってしまうのは私の被害妄想なのだろうか。原発の施設に水を掛けて冷却しているといった辺りの現況の時は、割合に細かく情報が発信されていたようにも思う。私は主にインターネットを介してニュースを読んでいた為、その折にテレビや新聞がどうであったかどうかは分からないのだが。

とにかく、まるで情報管制が敷かれているかとも思わせる現在の情報の少なさに私は呆れ、辟易し、不安を覚えている毎日だ。当初の頃は風評被害だと言われていた当該対象地域の生産物だが、今でも同じことが言えるだろうか？ 果たして真実、風評であると誰が自信を持って正しく言い切れるだろう。仮にこの国のトップがそう告げたとしても私は信じられないし、多少乱暴な言い方をしてしまえば信じる気もない。少しでも震災以降の国の状況に関心を持ち、インターネットなどでニュースを追い掛けている人間ならば分かると思うが、今のこの日本という国が如何に危機に晒されているかどうかがよく分かるのではないだろうか。

事は空气中に広がり続けている放射能による被曝だけには決して留まっではない。留まるはずもない。それによる野菜や家畜などの生産物が受ける被害、それを食物としている私達人間の被害、海に放たれた放射性物質を多量に含む汚水、そこで暮らす魚類、それ

を食べる私達人間の被害、被災した人々への様々なる生活保障と災害補償、復興の為の人員と財源、原発施設で作業をする人間、それを指揮する人間、将来に渡る白血病への恐怖、財源確保の為の増税への懸念、生産地の偽り、輸出入に係る諸外国との問題、農業や漁業を生業とする人の生計、雨の日の不安、外出時の不安、食べ物や飲み物への不安、明日への不安。

また、震災によって生じたことのみを日々、政治家らが追うわけにもいかない。毎日、何かしらの問題が、犯罪が、法律が、対処を求められる。皆、多かれ少なかれ大変だ。皆、多かれ少なかれ苦しんでいる。日常に追い詰められている。それでも生きていく。

頑張ろう、日本。復興。募金。節電。おおいに結構だ。誰だって元の通りの生活に戻れるならばその方が絶対的に良いに決まっている。私もそうだ。電車の本数も元の通り、電車内や駅構内やデパートや街の明るさも元の通り、食べ物や飲み物に放射能の懸念など覚え、雨の日も風の日も同様、安全なお茶がありますなどという但し書きを店先で見ることもなく、外食控えもなくなり、壊れた家屋も流された家屋も死んだ人間もない。何もかもが元の通り、何もかもが何もなかったと同じ状態に戻る。それならばどんなにか良いだろう。一億回祈ってそうなるならば私は一生涯掛けてもそうするだろう。だが、そんな都合の良い夢は起こるわけもない。誰も彼もがこの今の状況に向き合い、生きていかねばならないのだ。

しかしながら批判を承知で言うが、私には生命の絶対的尊重というものや自殺が批難される理由が、少なくとも今は分らないので、今のこの状況に、国に、自分に向き合って生きていかねばならないと思っっている人間のみがそうする必要があると捉えている。この現状に耐え切れず、死にたいと思う人間がいても最早、全く不思議ではない。食べ物が安全か分からない。飲み物が安全か分からない。雨に打たれても大丈夫か分からない。外を歩くだけで徐々に被曝している可能性が否めない。将来、今回のことが原因で白血病に罹って苦しんだ末に死ぬかもしれない。毎日、何かしらで誰もが疲れて

いる現状に、頑張ろう日本、頑張ろう東北と書かれた旗や貼り紙や食物が並び、目に入る。あたかも強迫であるかのように一日中を通して節電を強いられる。そのような現況に疲弊し切っている人間に頑張れ、頑張つて生きてくれなどと私は言えない。相手がどんなに親しい友人であつても、おそらく同じではないだろうか。

実際、私自身は毎日、放射能のことを気にしている。外出するたびごとに被曝しているように思っている。食べ物は東北産のものはほとんど購入出来ず、関東産でも悩むようになった。水は水道水を飲んでいるが、それで良いのかどうかたびたび自分に問い掛けている。雨の日の外出は非常に気が進まない。外国に逃亡したい気持ちもある。だが、私の友人にはここまで気にし、思い悩んでいる人間はいない。多少は気になるが、なるようにしかならないし、今、気にしすぎても仕方のないことだというのが概ねの意見だ。実家住まいで自分が料理をすることがない友人は、食卓に並ぶ料理がこの野菜で作られているか気にしたことは私に聞かれるまでなかったという。私にはとても信じる事が出来ない。本当に、気にしていないかったのか。本当に、気にならないのか。私は長年の友人を少し疑ってしまったほど、この日常に溢れている放射能を毎日毎日毎日、気にしてしまっている。これは異常なことなのだろうか？

見渡せば、外食をしている人々は割合に多く見掛ける。私も全く外食をしないわけではない。だが、元々、外食の頻度が低いせいもあるのだが、月に一度、あるかないかになっている。小腹が空けば、コンビニエンスストアでツナおにぎりを購入することもある。けれど、何の抵抗もなくそれを口にしてるとは決して言えない。スーパーの食料品売り場で、お惣菜や寿司を見ている人々も割合に多く見掛ける。

しかし、国産の表示だけでは私はもう惣菜を買うことは出来ない。寿司や海産物などでの外だ。そんな私がおかしいのだろうか？

このような日常的ストレスに晒された中で、私は近頃、ひとりきりだという自覚を強く強く覚えていく。覚え続けている。人生がま

るで独り言のように思えて仕方ない。ありふれた表現ではあるが、私がいなくても、私がいなくなっても世界は今日も明日も明後日も廻り続ける。私など、まるで初めからいなかったかのように。ひとり暮らしのせいもあるのだろうか。私は今まで友人に恵まれていると思い、幸せだと思っていたにも関わらず、こんなにもひとりきりだと思ってしまうている。どうしてこのようになってしまったのだろうか。考え続けた末、三月の震災以降、ゆるゆると私の根幹が変化してしまったのだと、最近になってようやく私はそうと理解した。気が付いたことが幸福か否かは知らない。

私は二十年以上の人生と呼ぶには未だ短いのかもしれぬそれを生きて来て、さびしいと思ったことはなかった。否、強く強く思ったことはなかった。あるいは思ったことがあったとしても、すぐに打ち消していたに違いない。

人間は皆、ひとりきりであり個の生物であり、コアセルベートのようでは決して有り得ない。生まれ落ちた時に個であるならば死に行く時も個であることに他ならない。たとえ、愛する人が、友人が、家族がいたとて、それは同じことだ。生まれる時も死ぬ時も、誰とも一緒ではないし、誰も連れて行けない。誕生日を幾度祝われても、命日を幾度祈られても、人間が個別の生き物であり、ひとりきりである現実も事実も、鏡のかけらひとつ分すら変わらない。何も、変わらない。

人間が個であり、生き物として本当の意味で交わることの出来ない命であること、自らの本質的問題には最終的には自らしか向き合うことが出来ない、解決は出来ないこと、身体的病、精神的病に立ち向かうのは最終的には自分ひとりであるということ。そういった考え方を私は数年前に知っていた。だが、事実的、体験的なものとしてはおそらく全くと言って良いくらい分かってはいなかったのだろう。それが、今年三月の震災以降、少しずつ浮き彫りになり、最近になって痛感するに至っている。

不幸自慢をするわけではないと前置きさせて頂くが、私の家庭環境は多分に良いとは言えない。中学校に上がるまではそれが普通かとすら思っていたが、高校に入って、周囲の友人と互いの環境を話す機会を持った時、ああ、自分は違っていたのだと静かに思った瞬間を今も強く覚えている。その環境については後程に記述するか否

かは今は分からないのだが、とりあえずここでは省略させて頂く。しかしながら、最近になって私は思う。何故、あの環境で「さびしい」と思うことなく自律神経を保たせて来られたのか。また、ここまでの神経を持ちながら、何故、ここに来て「さびしい」と思ってしまったのか。それほどまでに震災は負荷を私に与えたのか。実質的には私は被災していないのに？ 衣食住に困ることはないのに？ 怪我もしていないのに？

だが、目に見える怪我だけが全てとは言えないのかもしれない。また、苦労は比べるものではないのかもしれない。世の中、私よりもっともつと大変で生きるにも

苦しい人々が存在するだろう。福島では、今も不安に押し包まれている方々が本当に多くいるだろう。だが、乱暴な言い方になってしまつが、それは直接的には私とは関係のないことなのだ。もつと言つてしまえば、私が被災していないからと言つて、苦しくないことが正しいわけでもなければ、苦ししいことが正しいわけでもない。

ただ、震災以降、少しずつ車輪が軋みを上げるように私のさびしさや苦しみは浮き彫りにされ、日々を不安に苛まれ、病院嫌いの私がメンタルクリニックに通い服薬することで何とか日常を日常たらしめている。そうあるうと努力している。それだけだ。ただ、それだけのことだ。

誰が苦しく、誰が悲しく、誰が生きることにあがいていようと、本質的に捉えて言い切つてしまふことが許されるならば、それはその本人の抱える事柄であり、第三者からしてみれば無関係と言つても良いくらいの出来事に他ならない。よって、私がこうしてさびしく苦しく、ぽっかりと浮かぶ月を見上げては上階の情事が聞こえて来る部屋に帰りたくなくて泣くことも、半年以上のそれがきっかけによつてメニエール病の疑いが掛かつて通院が始まつたことも、引越しをしたくともそこまでの資金がないことも、精神的不安を緩和させる為の薬を飲めば資格取得の為に通っている学校での授業中

に眠たくなつてしまい支障をきたすことも、作家になりたくてあがいていることも、一切合切、何もかもが、第三者からしてみれば正直なところ、無関係なことなのだ。

さびしいなら慰めてあげる。話を聞いて欲しいなら聞いてあげる。同意して欲しいならしてあげる。アドバイスが欲しいなら与えてあげる。お金で買えるもので欲しいものがあるなら買ってあげる。電話が、メールが、チャットがしたいならしてあげる。出来る範囲で友人はその人にしてあげたいと思うだろう。その人が、自分自身で自分に対処出来ている内は、まだ良い。世の中の大体の人間はおそらく、そうやって今日も明日も明後日も生きているし生きて行くのだ。したいことと、すべきことの狭間でバランスを取りながら。仕事をしたり学校に行ったりゲームをしたり本を読んだり買い物をしたり。少しずつ我慢をして、少しずつ昇華させて。

だが、その人が自分自身で自分に対処出来なくなつて行つたとしたら、どうだろうか。大体において、急激にそうなるということはほとんどないだろう。私は医師でも専門的知識を多く持つ人間でもないので推測にしかならないが、昨日までごく普通の生活をしていたのに、今日になって急に電車に飛び込む人間がいるだろうか。ゼ口ではないだろう。この世は可能性の世界なのだから。だが、その場合であっても、急にそうなたとは考えにくい。軋みは、ごく微量ずつであったとしても降り積もつて行っていることが通常ではないだろうか。

以下のようなことはおそらく有り得ないが、ストレスフリーの生活を送っている人間が翌日に起床し、そうだ今から手首を切つて死ぬのと思うだろうか？ おそらく否、だろう。全ての人間に出会い、全ての書物を読み、検証したわけではないから、推量の形容詞が多くなってしまうことがもどかしいが。

話を戻そう。自分自身に自分で対処出来なくなつて行つた人間に、他者は一体何が出来のだろう。医学的見地からすれば、通院、服薬、カウンセリングなどがある。確かに、それらは有効だろう。実

際、今の私がそれに当て嵌まる。私が行つて^{おこな}いることは通院と服薬だ。今回が初めてのことでない。これは、完治するのだろうか？ それについては後に触れるとして、通院、服薬、あるいは加えてカウンセリングを施したとして、本当に人は自分で自分に対処、コントロール出来るようになるだろうか。

数週間前までの服薬していなかった私と、現在の服薬を始めて数週間経過した私とでは、確かに明らかに違いがある。急に泣き出すことはほとんどなくなったし、資格取得の為の学校にも何とか通えているし、とにかく得体の知れない不安に苛まれて何も出来なくなったり、あるいは友人に得体の知れないメールを撒き散らすこともなくなった。だが、根本にある感情は消えない。不安、さびしさ、混沌、困惑、不満、悲しみ、怒り、死への誘引。勿論、根本にある感情はこれらだけではない。当たり前のように、嬉しさや感動、喜びや期待もある。

そもそも、私は感情や行動にプラスやマイナスの形容、あるいは記号を付けたり、正負で表すことが嫌いなのだが、明らかに前者は負であり後者は正であるだろう。私がそついった表現を嫌うことに明確な理由はないようにも思うが、良く良く思い返してみると、高校の時の担任教師が頻繁に使用してしたこと起因するのかもしれない。何かに付けては、プラスだとかマイナスだとか言っていたように思うので、知らず嫌悪を覚えていたのかもしれない。

少し前から思っていることは、思考や行動は「ただ、それだけ」のことであつて、そこに正負などなく、正負を付加すること自体が無意味で愚かだと、そのようにも捉えている節がある。これらは蛇足かもしれないが、とにかく私は私として私という人間の整頓を行いたい^{たい}が為にこれを書き記しているのであつて、処々にそのような箇所が見受けられるかもしれないが、ご容赦願いたい。表記揺れなどもあるだろう。私は少なくとも現時点において、これを作品として仕上げる意志はないのだ。このワードのデータこそが私において蛇足と成り得ているかもしれないのだ。最早、何が必要で何が不必

要、あるいは蛇足であるのか私自身、良く分からないのである。

閑話休題。通院して、医師と少し話をする。症状を伝える。症状を緩和させる薬が出される。服薬する。薬が自分に合えば、数日、あるいは数週間で症状は落ち着いて行く。薬が合わなければ再び病院に行き、医師にその旨を伝える。以前とは違う薬が出される。

本当に死にたい人間は、誰にも言わずにひっそりと死ぬと聞いた。では、医師も含め、誰かに言ってしまう人間は本当には死にたくないのだろうか。あるいは、死への想いが本当ではないという証明なのだろうか？ また、あるいは、本当は生きていたいがゆえに引き留めて欲しいのだろうか？ 今の私には良く分からない。

だが、本当に死にたい人間はこうして誰かに言ったりせず黙って死ぬと言われて、私の感情に否定をぶつけられたように思ったことは事実だ。紛れもなく。ならば、私の死にたいという気持ちは偽物なのだろうか。純度の低い、紛い物なのだろうか。宝石にたとえられるような感情では決していないが、インクルージョンを多く含む使い物にはならない、取るに足らないものなのだろうか？ そう思っただけで泣いた私がいたことは事実だ。紛れもなく。それなれば黙って死ねば良かったのだろうか。そうしたら、あの子は本当に本当に紛れもなく真実、死を考えて実行してしまうほどに悩み苦しんでいたと「評価」して貰えたのだろうか。いや、私は「評価」して欲しかった、あるいはして欲しいのだろうか？

「評価」とは少し違う気がする。ただ、私は分かかって欲しかったのだ。本当に私が死を想うほどに苦しいということ。それが単なる甘えだと評されるならば、それはそれで仕方のないことだ。人の価値観は多種多様で、考え方も判断基準も全てが異なり、それこそ私と全く同じ価値観の人間など、おそらくこの世にひとりだっていないのだから。

だが、多くはないかもしれない私の友人の中に、ひとりだけでもいい、私の苦悩とでも言うべき悲嘆とでも言うべき絶望とでも言うべき薄暗い部分を否定せず、受け入れるとは言わないまでも、たとえ表面上だけでも理解してくれる人が、いはしないだろうか。

本当の意味で相手のことを分かるなどということは生涯を懸けても不可能だろう。それを少し、さびしいと思う。だが、それは仕方のないことだ。繰り返しになるが、人は揺りかごから墓場まで個別の生き物で歩いて行くのだから。喜びはかあなや悲しみを幾度も幾度も繰り返しながら、人間は自らの埋まる墓穴はかあなを掘るように人生を歩んで行くしかないのだ。

どうしたら分かかって貰えるのだろうか。私が本当に苦しいということ。時に死を想うほどに悲しみに溢れてしまうということ。それを薬でおそらくは抑えて生きているということ。医者に話すことと友人に話すこととは訳が違う。医者に話すことは、薬を得る為という目的が多分に大きい。なるべく正確に自分の現状や感情を伝え、それが一時的にでも異常と判断されるようであるなら、それを抑制、あるいは緩和する為の薬を出して貰わなくてはならない。生きて行きたいのならば。以前、友人に言われたことだが、また先に記述したことでもあるが、死にたいのならば誰にも話すことなく黙

って死ねばいいのだ。医者でも友人でも、死にたいと告げられて、じゃあ死ねばいいのに、と答える人間はきつといないだろう。沈黙してしまう人はいるかもしれないが。

正直に言えば、私はひどく疲れている。約五年程前から現在に至るまでの間、不定期的に症状を繰り返しては死と生の間で揺れ動き、そのたびごとに何かをなくして何かを得て、惰性のようなものにも助けられながらこうして生きている。それに一体、何の意味があるのだろうか。

某ゲームで、生きることの意味なんてないんだと言い切った主人公がいる。たかがゲームの話と思われるかもしれないが、私は今もその言葉が非常に印象強く胸に残っている。今の私にはその言葉を否定も肯定も出来ないが、確かに生きることの意味などないのかもれないし、求めてはならないような気すら私はしている。求めるから疲れるのだ。最初からありもしないものを。

思うに、自殺を考えたことのない人間に、自殺を考えている、あるいは考えたことのある人間の気持ちというものは分からないのではないか。人間は、自らが体験したこと以外のことには鈍く、理解しづらく創られているように思える。無論、私も含めてだ。百聞は一見にしかずという言葉もあるように、幾ら聞いても分からないことはあるし、一度見れば、経験すれば、たちどころに分かることがあるのではないだろうか。

私の友人には自殺を考えたことのある人間と、自殺を考えたことのない人間がいる。後者に至っては私は本当なのかどうかと疑ってしまうくらい、信じ難い存在である。本人がそう言うのだから信じる他ないのだが、三十五年程を生きて来て、本当に一度も自ら死のうと考えたことがないのだろうか。また、そのような人間に私のような人間が相談をしたところで、表面上の感情だけでも理解して貰えるのであろうかという疑念が失礼ながらも残る。しかしながら、不定期的に繰り返し返される私の症状に伴う暗い話に多忙の中、時間を割いて付き合ってくれることには素直に感謝しているし、真実、

ありがたいと思っている。

自殺を考えたことがあると、私の話を聞いて告白してくれた友人もいる。時間や環境に追い詰められ、もう死んでしまえば逃げるこ
とが出来ると、考えなくて済む、終わりにすることが出来る、そう思
ってマンションのベランダから幾度も下を見た。他の友人の話で
は、半分以上の体がベランダから落ち掛けたところで家にいた家族
が偶然見付け、引き戻されたこともある。

現代は、検索するということがインターネットによって容易に出
来る時代だ。死にたい、という言葉ひとつで幾らでも記事がヒット
する。ブログや掲示板に、苦悩を綴る人間が本当に数多くいる。つ
い最近のことだ、私自身もそういった掲示板に書き込み、返事を貰
い、気持ちを緩和させることが出来たのは。だが、私のように思い
留まった者もいれば、メーターの針が振り切れるように死んでしま
った者もきつといるのだろう。年間の自殺者の数は年々増加の一途
を辿っているし、人身事故により運転を見合わせていますというア
ナウンスが駅構内に流れることも決して珍しくはない。自殺を取り
上げた、あるいは多少なりとも織り込んだ書物やゲームも多く存在
する。最早、自殺が特別なことだとは少なくとも私は思えない。

これだけ自分が苦しんでおきながら以下のように言うことも何か
違う気がしなくはないが、死にたい人間は死ねばいいとも思う。ど
うやって、その人を引き留めればいいというのだ、本当に死にたい
人間を。その人の進む人生に、希望も歓喜も約束出来なければ、絶
望や悲嘆の可能性を全否定することも出来ない。もうやめたいと願
う人間に、頑張れと励まし、エールを送り、世に引き留めることが
本当に正しいことだろうか。間違いとは言わないし言えないが、正
しいとも私には言えない。

だが、私のような人間と出会った、あるいは今、出会っている方
は、どうか出来ればその人の話を聞いてやってほしいと願う。本当
には死にたくない、本当は将来の夢がある、本当は生きていたい人
間が、時間や環境や性格や人間や、様々なもの、あるいは何かひと

つものものに追い詰められて、もう死んでしまうしかないのだろうか
と、死んでしまおうと思っていることを言葉少なにでも告白
して来たのならば、私の身勝手な願いではあるが、どうか話を聞き、
この世界に繋ぎ留めてほしいと思う。

私の友人が言った、本当に死にたいならば黙って死ねばいいとい
う言葉は乱暴に思える反面、本当に死にたい人間は本当に黙って死
んでしまうのだろうかということを私に気付かせてくれた。確かに、
私于心底から死にたいのならば人の迷惑顧みず快速電車に飛び込む
だろうし、包丁で手首を切るだろうし、高層ビルの屋上から飛び下
りるだろう。それをしていないということは、本当には私は生きて
いたいのだ。生きて、作家になりたいのだ。それがせめて通過点と
して叶うまで、私は何が何でも生きていたい。だからこそ、こうし
て悩み、放射能の件でも必要以上に気に掛けてしまうのだろうと思
う。一秒でも多く生きていたいから、死とはなるべく離れていたい
からだ。

しかしながら追い詰められた時の、死を想う感情が偽者だとか、
程度が浅いだとかは私は思わないし、そのように友人などから思わ
れてしまうことは悲しい。どうせ死なないだろう、死にたいと言っ
ているだけだろう、本当に死にたい人間は黙って死ぬのだからこう
やって告白して来ている以上、死ぬことはしないだろう、まだ大丈
夫だろう。そう捉えられてしまうことが余計に私を追い詰めるよう
な気すらする。

現在の担当医とは別の医者に、大丈夫そうだと告げられたことが
ある。また、もう二十分以上話しているし次の患者さんも待つてい
るわけだし、もういいかな、とも。確かに初診ではない私が二十分
も自分の内情を語ったところで必要のない部分と判断されるのかも
しれない。医者は対応する薬を間違いない処方したいだけであつて、
私の環境や感情の深いところまでは求めていないのかもしれない。
たとえば、毎日がやたらと不安である、原因はおそらくあれである、
自覚症状としては眩暈が多い、ふらつく。そういった具体的、かつ、

表層的な情報を患者から聞き出したいのかもしれない、処方箋を出す医者としては。だが、良く考えてみてほしい。精神状態が普通ではないと自分で判断、あるいは他者に判断されたから病院にやって来たわけで、その人間がきちんと順序立てて自らの現状や、こうしたい、ああしたい、といった願望や希望を確実に医者に自分の口で伝えることが出来るだろうか？

出来る、と言われてしまえばそれだけの話だが、私はそうとは限らないと考える。平素の状態ならば、明るくはきはきと話せている人間であっても、一日の中で急に死にたくなるような想いに襲われてしまうようになった人間が、病院に行ったところで、自らの症状、また、医者が求めている情報を体系立てて伝えることが出来るとは限らないだろう。私自身はそうであったのだが、私だけが特殊であって、その他の人間はきちんと話すことが出来るのだろうか。なかなかそうは思い難いものだが。

また、たとえ待合室が混み合っていて、多くの患者が診察を待っているとして、それを思い遣る心が医者にあつたとしても、現在診察中の患者に伝えるべき事柄であろうか？ そうすると患者はますます焦り、本当に話したいことや話さなければならぬことの整頓が成り行かなくなるのではないだろうか。少なくとも私はそうなつてしまい、話すべきことが結果として良く分からなくなつたまま診察を終えられ、その帰途の駅でホームの端から端までをとぼとぼと歩き、いつ飛び込んでやろうかと、電光掲示板を見ながら快速電車の通過を待つていたことは記憶に新しい。

人間に様々いるということは、当たり前前に職業によつても様々な人間がいるということだ。現在の担当医は初診の時にも診てくれた方で、話を焦らせるようなことはしないし、だんだん自分でも何を伝えたいのか分からなくなつて来た折でも、質問をして一度、頭の中をクリアにさせてくれるので、私には合っている医者のようだ。その質問の仕方でも、問い詰めるようなところはなく、あくまでも心情を整頓させる為という意図が大きいのではないかと私は考える。

得てして質問とはそういうものかもしれないが、別の医者のように、早く症状をはつきりと話してくれというような焦燥を募らせる如くの聞き方ではないところが私にとって救いとなっている。

私の症状は軽いものなのかもしれない。軽い薬で、ある程度は抑制出来るのだから。小説や随筆の執筆、友人との外出や電話、読書、映画鑑賞など、したいことが思い浮かび、実行出来るのだから。その点では私は恵まれたと言えるだろう、自らの性質にも、友人の存在にも。だが、不定期的に繰り返しては治まりを続けている、この五年間という時間に私は疲弊してしまっている。たとえ落ち着いても、どうせまたいつしか死にたいと思うほどに落ち込み、泣き、訳が分からなくなる瞬間や時期が来るのだろうと思うと憂鬱極まりない。それでも今は、作家になりたい自分を捨て切ることが出来ないで、こうして何とか生きている。

相変わらず騒音はなくならない。思うに、私がこんなにも疲弊しやすくなっているのはひとえに現在置かれている環境に起因すると言って、まず間違いがないと思う。賃貸物件の一階に住む私の上階に住む住人は生活音を越える音を多く出す女性で、普段の足音からして踵から落とすようにしてのものである為、相当な精神的負荷が階下の私には掛かる。早朝三時半頃に起床し五時に洗濯機を回し七時頃に家を出て行く。朝五時に掃除機を掛けることもある。その場合は大体において男性が夜に訪問をする日だ。そして情事に及ぶそのような他人の生活サイクルなど知りたくもなく興味もないのだが繰り返されれば認識してしまうことは致し方ないと言える。

ここ半年程前から騒音はひどくなり、情事の際にはアダルトビデオ鑑賞でもしているのかと思つた程の音が階下の私に聞こえていた。現在もそれはあるが、管理会社に洗濯機などの使用時間帯や足音などの件で苦情を二回入れた結果、割合には改善されたようにも思う。朝五時の洗濯が朝七時になったり、情事の回数は減つた。だが足音は依然として変化はないし、情事の音が控え目になったとは言え聞こえることは変わらない。おそらくスプリングベッドなのだろう、そのの軋む音と女性の気持ちの悪い喘ぎ声が聞こえる。ひどい時には上階の隣の部屋からも、そういったものが聞こえて来る。また、最近、隣に入った女性の住人は声が大きく、夜の二時頃に男性と話していたり、同時刻くらいにテレビを観ていたり、朝の九時くらいから三時間程、電話をしていたりする。

基本的に、この建物自体の構造が良くないのだろうとは私もさすがに分かつて来た。建造物に詳しくはないのだが、軽量鉄骨という類いに分類されるようだ。木造建てよりは防音性は高いと聞いたが、

本当だろうか。私の部屋の照明は天井から吊り下げの式のものだが、それが、ぎしりと言うくらいに上階からの衝撃を受けることがある。三月の震災からしばらくの折には地震かと思い、上を何度も見上げてしまっていたが、やがてそれは上階に住人の情事によるものだと理解した。理解したことが幸か不幸かは分からない。

半年程前、情事による騒音に三十分程耐えた後、急激な眩暈に襲われて私は立ち上がることも困難な事態になり、救急車を呼んだ。あとになって分かったが、回転性眩暈というものらしい。メニエール病に多く見られる症状らしいが、あれから半年程経過した現在でも、私がメニエール病なのか否かは判然とはしていない。幾度か通院し、そのたびごとに聴力検査もおこなっているが、分かったことは、常人の範囲内ではあるが聴力の低下が見られ、特に低音が聞き取りづらくなっていることだけだった。

通常、メニエール病と判断するには、半年から、それ以上の時間が掛かると医師から聞いた。特に私の場合は約半年の間で回転性眩暈は二度程しか起きておらず、毎日のように起こる症状は耳鳴りと耳の痛みが主な為、医師も特に判断しづらいのかもしれない。また、家の環境と、それによる私の心情を告げたところ、精神的なところから生じているものでありメニエール病ではないかもしれないという言葉を受けた。だが、今現在も、メニエール病ではないという判断はされていない。それがまた私の不安に拍車を掛けるものでもある。

しかしながら、毎日は絶え間なく廻る。私がメニエール病であろうとなかろうと、たとえ神経過敏や聴覚過敏になつていようとなかろうと、学校に行こうと休もうとも関係なく、日々は確実に緩やかに廻り続ける。時間の早さというものは誰にも平等だ。だからこそ本当に生きて行きたいのならば、負けてはならない。環境にも事情にも、自分自身にも。

勝つとか負けるとか、プラス思考とかマイナス思考とか、ポジティブとかネガティブといったような表現が私は好きではない。おそ

らく、高校生の頃に担任教師が幾度も幾度も繰り返したせいのような気が漠然とするが、それ以上に多分、私は思考や感情に符号を付けることが好きではないのだと思う。どんな思考であれ、どんな感情であれ、それはただ、それだけのものとしてそこに存在するのみであり、形容の必要などないと考えているように思う。私自身にも理由はあまり良く分からないが、とにかく、思考や感情にプラスもマイナスもないと思うのだ。

一見すれば、暗いことばかり書かれているようなこの文章でさえ、私はマイナスやネガティブとは呼べないように思うし、その逆もまた然りだ。私は私として、こういった考えを持っている。こういった日常に生きている。また、そこから脱却する為の一環として、これを書き綴っている。ただ、それだけのことなのだ。

私が生まれるよりも以前に誕生している映画のひとつに、「Kramer vs. Kramer」という洋画がある。その役者インタヴューの中に、「病人に選択肢はない」という言葉があるのだが、まさにその通りだと、先日、久しぶりにこの映画を鑑賞して思った。これを観るのは二回目になるのだが、最初の鑑賞時に役者インタヴューまで観た記憶がない。だが、当時の私が同じ言葉を耳にしたとて、今と同様の心情になったかどうかと聞かれると、イエスとは言えない。それは単純に時間の経過による私自身の成長や価値観の変化などが要因になる可能性だけによる回答ではなく、メンタル面での「病んだ」という状態をおそらくは経験していないからだ、当時の私が。

「Kramer vs. Kramer」という映画に出て来る登場人物のひとりには、自殺寸前まで精神を病んだ状態になる。その描写は少ないが、それを演じた役者の言葉だ。「病人に選択肢はない」という言葉は。

私が精神を病んでいるのかは分からない。知らない。だが、メンタル面を安定させる為、不安を取り除く薬を服用しているという事実はある。医者から病名を告げられたわけではないし、カウンセリングに掛かっているわけでもない。だが、そういう薬が私の日常を日常たらしめる為に必要になっている現実は事実として今、ここにある。明日も明後日もあるだろう。私は、一体いつまで、この現実を受け止めて生きて行けばいいのだろうか。寿命を全うするまでだろうか。

最初にそのような薬を飲んだことは約四年程前だろうか。その医者とは相性が合わず、薬による改善も全く私としては自覚されず、

病院が移転することをきっかけに通院を止めた。そして約一年前、別の病院に行った。そこには今も通院しているが、一年前に初診で掛かってから一年間、一度も通院をしなかった。それは、行かなくても済んだからだ。少なくとも私個人の判断では。だが、思い返してみるに、精神的不安を強く覚えることは幾度もあったし、また、それゆえに「病院に行く」という判断が自分では出来なくなっていた時期もあったように思う。そもそも病院自体が好きではないという関係しているに違いない。しかし正直なところを言うと良く覚えていない。それは、覚えている必要がないくらい正常だったのか、過剰なるフラストレーションによって異常な状態になったがゆえに覚えていないのか、はつきり言って定かではない。だが、何を以って正常とし、何を以って異常とするのか、私には分からない。何が普通で何が常識で何が正しいか、毅然と言い切れる人間はいるのだろうか。

一体、いつ頃からこのように不安を感じやすい性質になってしまったのだろうか。人の顔色をどことなく窺っているようにも思う。混雑していなくても電車は苦手だ。瓶詰めにした蟻のような気がして来る。混雑した駅や混雑した駅前が苦手だ。人間が私も含めて生ごみのように思えて来る。電車や教室のように、一定の空間に一定の時間、同じ人間達がいて、そこに私もいるという状況が苦手だ。喘息以上に息が苦しくなるような気がして来る。それはきつと錯覚なのだが、何故、私はそのような気分になるのだろうか。街中で、人とすれ違う瞬間が苦手だ。行列に並ぶことが苦手だ。混雑した階段を上ることも下りることも苦手だ。人にまみれることが苦痛だ。だが、人にまみれることが得意だという人間はあまりいないだろう。程度の違いなのだ。分かっているつもりだ。

しかしながら何故、私はこのようにストレスを受けやすいのか。そういう性質だ、そういう性格だ、そういう人間だと言われてしまえばそれまでだが、私は生きていく限り一生涯、これと付き合っていく行かなくてはならないのかと思うと、眩暈を覚えそうになるくらい

には気が滅入るのだ。

病人に選択肢はない。まさしく、その通りだ。私が病人かどうかは先に述べたように分からないし、知らない。だが、どこまでもどこまでも私という人間は私という人間ごと、私に付いて来る。選択肢はない。付き合うしかないのだ。この世界で、現実で、日常で、私が私として生きて行きたいのならば。

現代人など、多かれ少なかれ、皆、病気だと思う。病名が付かなくとも、きつとそうなのではないだろうか。そして私の状態など軽いもので、もつと苦しい思いをしながらも生きている人間、生きて行こうとしている人間は、大勢いる。そのように思う。けれども、この私の現実の中で、私は一体どうしたらいいのだろう。不安だ、ストレスだ、悲しい、泣きたい、どこかに行きたいのにどこにも行けない、自らの性質と向き合うことに疲れた。そんな思いを抱えて死ぬまで過ごして行かなくてはならないのか。

不定期的とは言え、もう約四年以上にはなるのだ。私が私を少しおかしいのではと初めて思ってから。風邪ならば、大体いつ頃には治ると分かるだろう。症状の緩和も早いだろう。だが、精神的なことに関しては、いつ頃に完治するとは誰も、医者も、言えないのではないだろうか。症状の緩和についても、緩和に留まってしまうことが多いのではないだろうか。今の私は緩和に留まっているようだが、いつまで薬の服用を、通院を、続ければいいのか分からないし、もう病院に行かなくても大丈夫だとは決して思えない。

先日、自宅の上階にて騒音があつた際には十日分の薬を一度に飲んでしまった。翌日、何とか電車に乗って駅に降り立ちましたのだが、立っていることすら苦痛で倒れ込んでしまった。あの夜は、もう駄目だと思つたのだ。耐え切れないと。上階の住人がいなくなればいいと、もう幾度、思つたことだろう。あの日、私は自分が消えてなくなるしかないと思つた。十日分の薬で死ぬことが出来るとは思わなかったが、何も考えなくなかつたし、考えてはならないと思つた。気が付くと手首に包丁を何度も何度も強く当てていた。だが、

引く勇氣はなく、規定の服用量を超えてのコントミンの服用に私の行動は留まった。本当に死にたいのなら包丁を胸に突き立てればいいと思つた。だが、出来なかつた。痛みや死そのものに対する恐怖もあつただろうが、おそらく、私は本当には死にたくないのだ。

引つ越したい。書きたい小説がある。書きたい台本がある。行きたい水族館や動物園がある。観たい映画がある。学びたいことがある。読みたい本がある。飲みたい紅茶がある。全てを知りたいと思つ程の知識欲がある。友人が、いる。願望や希望や喜びがあること、何と素晴らしく尊いことか。ここに逆接の接続詞を持って来ることは本意ではないのだが、敢えて、それでも言おう。しかしながら、私はいつまで私の薄暗い性質と付き合つて行けばいいのだろうか。死ぬまでだろうか。これは治らないのだろうか。そもそも病気なのだろうか、性格なのだろうか。正常なのだろうか、異常なのだろうか。こういう人間だからこそ、このような随筆めいたものを書いているわけで、こういう人間だからこそ書ける話があるはずだが、そのようにして自分で自分を幾度救済すれば私は本当に救われるのだろうか。

震災以降に覚えてしまった、自分はひとりきりで何をしてもひとりごとのようであるという感覚は未だ拭えない。一度覚えてしまつた心情は、何かしらのきつかけがない限り変化することはないのだろうか。だが、二十四時間、全ての時間、友人に共にいてくれなどと言えないし、仮に少なくとも今の私に友人が同じことを言つたとして、それは無理なことだ。だから分かつている。無理な願いを私がいつの間にか抱えてしまったということに。

明日も私は電車に乗つて、慣れた駅に降り立つだろう。瓶詰めにされた蟻のような心持ちで。それでも全ての事柄は等しい時間の下に廻るのだ。私も、誰も、皆。

正式にどう呼ぶのかは分からないが、私は良く「揺り戻し」と呼んでいることがある。何かしらのきっかけで、以前と似たような精神状態になることだ。

先日、それが起こった。とは言え、まだ安定もしていない状態の上でのことだったので正確にはこれに該当しないのかもしれないが、ともかく約三日程前、深夜二時頃、おそらくはスプリングベッドであるものの軋む音が聞こえて来たのだ。吐きそうになった上、正直、ここに書いてはならないと思われる他者へと向ける感情を自覚した。癇癩持ちではなく、自他共に認める程、おっとりとした性格のようだが、あの時、私は扇風機を壁に向かって投げ付けてしまった。愚かなことだ。扇風機と壁が傷むし、騒音の元となっている上階の住人だって人間なのだ、そのような対応を私は人間に対して本当はしたくない。

だが、最早、半年間以上に渡って耐え、聴覚過敏や神経過敏におそらくなり、メニエール病の疑いすら引き出された私は、咄嗟に立ち昇った感情を抑制することが出来なかった。泣きそうになりながら耳栓をして、その日は眠った。耳栓はこの日だけではなく、もう毎日、眠る時には習慣となってしまうた。安心出来ないのだ。しかしながら耳栓をしていても聞こえることもある。イヤホンを使用して音楽を聴いている時にも分かることがある。

建物自体の問題もあるのだろうと私もやっと分かって来た。と言うのも、隣に入った住人の電話の声やテレビの音、その他、物音が良く聞こえるし、また、上階の騒音以外の生活音、つまり台所の水道を使う音や、お風呂を使用していると分かる排水溝の音などが聞こえるのである。そのような話を幾人かの友人にしてみたところ、

建物の構造がおかしいという結論に至った。

勿論、上階に関しては住人の問題もある。また、元を正せば上階の住人が原因とは言え、現在の私はおそらく過敏になっているのだ。拾わなくていい音を拾い、気にしなくていい音を気にしている可能性は非常に高い。だが、音の大きさはさほどでもなくなり、頻度が低くなったとは言っても、行為をしていると分かる音が伝わって来るだけで私は泣きそうになるし、実際に泣きながら帰った日も何度もある。

聞こえた日の翌日、擦り切れた神経で資格取得の為の学校に行き、泣きそうになりながら授業を受け、泣きながら友人と電話をしたりメールをしたりしている。これは、管理会社に伝えていいのだろうか。友人の一人は、伝えるべきだと言った。だが、別件の騒音で以前に三度程、管理会社に話をしている身であり、それによって上階の騒音は多少改善され、現在の騒音と言えば行為の音である。それも音の大きさ自体は、さほどでもないのだ。頻度も低い。だが、それによって泣いてしまう私や薬を発作的に多く飲んでしまう私や泣きそうになりながら身支度をして学校へ行く私がいることもまた事実だ。

最前の策としては最早、引越すしかないことは良く分かっている。重々、承知だ。だが、今すぐにはそれが叶わないので資格取得も含めて努力中であるのだが、その努力、もつと言ってしまうほどの日常がばらばらと降り注ぐ硝子のようになってしまっていることが、とてつもなく痛く、息苦しい。

基本的に私は自宅へ帰る。だが、基本的に私は帰りたくなくなってしまっている。帰ったところで、イヤホンによる音楽は決して手放せない。聴いていない時は、入浴中と化粧水などを付けている時くらいだろう。就寝時は耳栓をしている。メンタルクリニックに通い、服薬している。耳鼻科にも時々、行っている。

ここまでして私は生きていた方がいいのか、心底から悩む毎日が、もうこのところずっと続いている。騒音が悪化したことが半年前、

回転性眩暈で倒れて救急車を呼んだことが半年前。最近になって騒音は収まりつつあるとは言え、行為の音は残っている。私は身を以て知った。擦り切れた神経は、コップに水を注ぐようには元に戻らないことを。また、要因が改善、緩和されたところで、それでは元通りにこちらでも回復しました、とはならないことを。

何故、私がこのような思いをしなければならないのだろうかという心情が近頃は非常に強く、だが、管理会社にこれ以上伝えていいか分からないということ、市役所の市民相談課に相談をするにしても時間が掛かりそうだということ、引越しまはもつと時間が掛かりそうだということ。これらが私を締め付けている。

時間の経過と共に改善して行く問題もあるだろう。最終的には引越せるようになるかもしれない。だが、それは数カ月、あるいは半年くらい掛かるのではないかという、嫌な見通しが付いてしまっている。その間、私の神経はもつのだろうか。

人間が簡単には狂わないであろうことは自らの過去の経験なども踏まえて分かっているつもりだ。だが、神経というものは日々、フラストレーション下に置かれ続ければ摩耗されて行く。そして簡単には元に戻らない。私は一体、どうしたらいいのだろうか。だんだんと行動や判断に伴う精神力が低下して来ているように思う。もう何もしたくないとなる前に、行動を起こさねばならないことは分かっているのだが。低下に加え、私は勇気がないのかもしれない。

このような弱々しい私という人間は幾人かの友人に支えられて生きていくわけだが、その友人を振り回すことにも、もう本当に申し訳なさや罪悪感が強く募っている。かと言って、ひとりでも考え抱えて行けるのかと尋ねられると、その点は遙か以前に通過してしまっている。

人間は個別の生き物だ。私一人を二十四時間見続けているわけには行かないし、それぞれに生活があることも良く分かっている。良く、分かっているはずだ。だが、私は、どうしたらいいのか分からなくなってしまう、甘えと言われようと疲れてしまい、擦り減って

行く神経の戻し方も保ち方も分からないまま、一日、一日が過ぎて行くことに悲嘆と焦燥を覚え続けている。このまま、この家に住む私のまま、私は引越すしに向けて努力して行くことが出来るだろうか。友人を失わずに済むのだろうか。私は一人なのだろうか、それとも否か。答えの出ないことが、こんなにも恐ろしいものだ、私は本当には知らなかったように思う。私の、この薄暗い性質や、今のような環境がなかったならば、友人に迷惑を掛けることは、少なくともこの点においてはなかっただろうか。友人に、呆れられることが怖い。迷惑を掛けることが申し訳ない。負担になることが悲しい。謝っても謝り切れない。私は生きて行くことに不向きなのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1131x/>

遺書にはならない足跡

2011年10月20日03時05分発行